

北京サマーキャンプ感想文

「万里の長城」

河野 一平

北京首都国際空港からまもなく飛び立つ航空機に乗り込みながら、僕は北京での八日間を思い出していた。部屋に着いて荷物を置いたときから食堂へ最初の夕食を食べるために下りたとき。初めてルームメイトに会ったとき。なかなか眠れなかった初日の夜。

翌日から始まった北京観光。初めての授業。さまざまなイベント。国は違えど、「中国語」によって分かり合える人々との出会い。やがて少しずつ迎えた「最後」も鮮明に思い出される。最後の授業。最後の観光。最後の夕食。せっかく知り合った「中国語友達」との最後の会話。お互いに残念に思いながら別れを惜しみ何度も抱きしめあったとき。盛大だったエンディングセレモニー。まもなくこの思い出の詰まった北京から離れてしまうのだと思うと名残惜しかった。

今回のサマーキャンプで最も心に残ったのはやはり万里の長城に登ったときである。行きのバスから初めて写真でも絵でもない本物の万里の長城を見たときは、その長さや迫りに圧倒された。

しかし、万里の長城の本当の素晴らしさは登ってみて始めてわかった。どこまでも上に続く終わりなき階段は一段一段の高さも異なれば幅も違った。一歩でも踏み外せば一気に下まで転がり落ちてしまうに違いない、と登る足にも力が入った。

頂上だと思った風火台に着いてみれば、その先のもっと上にある風火台が見える。そうして一段一段登っていけばさらに上が見える。

過ぎ行く時間も気にせず、ついに頂上に立ったときの感動は今でも忘れることができない。

今回の万里の長城の体験は、なぜか僕に人生を思い起こさせた。これからの人生の中で、どんどん上を目指し越えていかななくてはいけない「風火台」がたくさんある。たどり着くたびに今までは見ることはできなかった上が見え、終わりだと思ってもまだ先がある。しかし、一步一步の前進が僕を確実に頂上へと近づけている。